

予定よりも遅い起床時刻だ。四人はずいぶん眠ってしまった。

と言うのも、目覚ましとして頼っていた漁師の声が一切聞こえてこなかったのである。

「やべー！ 寝坊しちまった！」と、ノランが叫ぶ。

「爆弾みたいな漁師の声はどうしたんだ」と、ネック。

「なんにも聞こえなかった……よね？」

「うん……」

「んだよ、おかしいなあ……」

ノランは後ろ頭を掻いた。

「今日は市場が休みだったとか？」

「まあ、とにかく行ってみようぜ」

一行は慌てて身支度を整え、宿を出て市場へ向かった。

本日も快晴である。昨夜はよく見えなかったが、宿を出てすぐそこに海があった。少し行くと、岸にたくさんの漁船が係留されていて、道々には太いロープや木箱や漁網があった。打ち寄せる波の音がする。徐々に目覚めていく海原が、朝陽にきらきらと輝いていた。

「ここが港？ あれが船？」

昨夜は暗くて見えなかった景色に、ノアはしきりに感動して瞳を輝かせた。ネック、ノラン、リアムは、そんなノアを微笑んで見つめていた。

数分ほどで市場に着いた一行は、辺りを見回した。

潮の香りの溢れる広い空間に、漁師と思しき人たちがぽつぽつといる。

しかし、みんな活気がない。どこかしゅんとしていて、暗い雰囲気をもっている。

その様子を奇妙に思いながら、ネックは近くにいた禿頭の漁師に話しかけてみた。

「なあおっちゃん、ちょっと尋ねたいことがあるんだけど」

「ん？」

ネックに声をかけられた漁師は、持っていた魚籠を置いて、

「なんだい？」

「最近、この港から出た船が難破した、ってことがなかった？」

「ん～？」

漁師は眉間に皺しわを寄せ、

「いや～？ んなことはなかったと思うけどなあ」

「漁船に限らず、客船でも」

「うーん。そういう大ごとがあったら船乗り全員に話が行き渡るはずだけど、俺は聞いてねえよ」

と、ふいに漁師が大きなため息をついた。

「そもそもさあ。最近、俺たちは海に出てねえんだよ」

「海に出てない？」

「ああ。なんだか知らねえが、四、五日前くらいからずっと沖の海流が暴れててよ。とてもじゃねえが船を出せる状態じゃないんだ」

「沖の海流というと、フィネイル海流？」

漁師は頷いて、

「岸の方はこんなに大人しいのにさあ。まったく、勘弁してほしいよ」

「そっか、だからセリがなかったんだね」ぽつり、とリアム。

「ホント、これじゃあ商売上がったんだよ」

漁師は、がっくりと肩を落とした。

ネックはちらりと海を見、

「海流が荒れてるなら、漁船だけじゃなくて、他の船も出られないよな」

「そらそうよ。客船員も大変じゃねえのかなあ。頼りの綱のネイクス便が出せねえんだもん」

「じゃあ今、ネイクス大陸に渡ろうと思ったら——」

「んー、北の『トリナウス港』から行くしかねえだろうなあ」

漁師は顎を掻き、「ずっとこのままだったら、『パルバ』はどうなっちまうんだろうなあ……」と呟いた。

「もう一個いいかな」

ネックは目線を送って、

「彼女に、見覚えは？」

漁師に、ノアを示した。

「んん～？」

漁師はノアをまじまじと見つめた。ノアは慌てて背筋をピシッと正した。

しばらくそうして観察を続けたが、

「……いや、知らねえなあ」

と、首を左右に振った。

「こんな可愛かわいこ子ちゃん、一度見たら忘れねえけどよ。記憶にないね」

「そうか。どうもありがとう」

漁師は「あいよ」と言い、魚籠を持って船の方へと歩いて行った。

「どういうことだ？ 船が出せてねえって」

漁師の背を見遣りながら、ノランが不思議そうに言った。

「それじゃあ、難破のしょうがねえじゃねえか」

「ノアは、船に乗ってたわけじゃないのかな……？」

う～ん、とリアムは船を眺める。「もう少し、他の人に話を聞いてみようぜ」

ネックの提案に一行は頷き、再び、目についた漁師たちに聞き込みを始めた。

……が、有用な情報は得られない。

どの漁師も船の難破などなかったと言うし、ノアに見覚えもない。そのうち市場から漁師が減ってきた。

「あと話を聞いてないのは、あの人だけだな……」

一縷いちるの望みをかけ、一行はロープをまとめていた初老の漁師に話しかけた。

すると、

「最近とある噂を耳にしてな、情報通の食堂のおばちゃんなら何か知ってるかもしれないよ」

僥倖きょうこうだった。一行は初老の漁師から件の店の場所を聞き、宿で散策の準備を整えた後、街の食堂へと向かった。